特集にあたって

坂江　渉

本誌創刊号の特集「『播磨国風土記』研究の新展開」は、ひょうご歴史研究室の風土記研究班と、これまで互いに交流をつづけてきた研究者とが、文献史学と考古学の双方の立場から取り組んだ最新の学術成果と、風土記の活用事業の成果を編集したものである。

『播磨国風土記』は、本格的な研究がもっとも遅れた風土記である。唯一のテキストである三条西家本が、幕末に「再発見」されて、ようやく写本・註釈の動きが出てくる。今のところ、地元播磨における初の風土記の註釈書は、本誌の垣内章論文で紹介されている、岡平保著『風土記考』（一八五九年成稿）である。もちろん幕末以降、研究が蓄積されていくが、出雲や常陸の風土記と比べても、歴史研究者の関心はそう高くはなかった。この間、研究成果がかなり積み重ねられたのは、主に国文学研究の分野であった。

ところが二〇〇〇年代の初頭前後の時期から、播磨各地の市町において、自治体史の編纂事業がおこなわれだした。そのいくつかの事業に関与した風土記研究班の文献史のメンバーは、風土記の故地のフィールドワークをおこなうことにより、その歴史資料的な価値の高さに気づくようになった。それ以降も、風土記に載せられる神話や伝承が、各地の地域生活史の復元や政治史の解明に役立つというスタンスのもと、県内の自治体関係者などと共同研究をおこない始めた。本特集は、このような研究蓄積を土台にして出される側面をもつ。

一方、考古学の分野に眼を向けると、播磨では一九八〇年代から、風土記にも関わる古代官道の「駅家」関連遺構や、祭祀遺物などの発掘が相次いだ。とくに駅家については、風土記所載の「賀古駅家」に関わる古大内遺跡（加古川市）、同じく「邑智駅家」に関連する向山遺跡（姫路市）、またそれ以外にも、小犬丸遺跡（たつの市）や落地遺跡（上郡町）が発掘され、さらに長坂寺遺跡（明石市）でも、「邑美駅家」に関わる遺構を確認で

きた。これらの遺跡をめぐり、考古学のみならず歴史地理学、自然科学を交えた学際的な共同研究がすすみ、播磨地域の駅家研究は、全国的にも注目される存在になった。これにもとづく展示会も、県立考古博物館や各市町などで何回か開催されている。本特集は、このような学術成果を吸収する形で編集されている。

文献史分野の坂江渉論文は、風土記にみえる断片的な神話の読み解き方と、伊和大神の神話群から復元できる播磨の地域社会構造と倭王権による地域支配の特質について、新しい解釈を試みた。古市晃論文は、風土記の播磨への人や渡来人集団の移動の説話をめぐり、従来見落とされがちだった瀬戸内海の西部地域からの人の移動の事実にスポットをあてた。飾磨地域や飾磨水門の「ハブ」機能の重要性や、それに対する倭王権の介在の痕跡を指摘する。高橋明裕論文では、「供御のモチーフ」と「交通」をキーワードにして、旧来の研究でなかった播磨における「印南野」の位置づけや、東播磨地域の特殊性が提起される。さらに垣内章論文では、前述の岡平保著『風土記考』の発見に至るいきさつが紹介されるとともに、その註釈の中身の先駆性が説かれ、今後、播磨における写本・註釈資料研究の進展への期待が述べられる。

考古学の中村弘論文は、前述の駅家研究や交通路をめぐる学術成果を踏まえ、風土記において、同一地名が冠せられる「駅家」と「里」の関係について新見解が提唱されるとともに、「荒ぶる神」伝承と官道との関連性を強調する。大平茂論文は、宍粟市伊和遺跡など、県内の祭祀遺跡・祭祀遺物を網羅的に取りあげた上で、やはり「荒ぶる神」伝承と土製祭祀具との関わり、あるいは駅家において木製祭祀具（とくに馬形）を用いた「祓え」行事があったとの見方を提示する。さらに藤田淳論文は、自らが県立考古博物館で担当した特別展「播磨国風土記」（二〇一三年）の開催時に試みたボランティア養成活動を紹介し、「少なくとも、参加したボランティアの心の中に『播磨国風土記』の種を植え、芽を育むことができたのではないか」と、その意義について指摘する。

それぞれの論文では、風土記の同一史料を扱う例が少なくないが、まったく同じ結論が出されているわけでない。そこが風土記研究の面白い点でもある。しかしいずれにせよ各論文は、それぞれの分野の研究成果を踏まえた最新の研究であると確信する。読者の方々にお読みいただき、ご意見、ご批判を賜れば幸いである。